

## 第70回 卒業式 式辞

卒業生の皆様、ご卒業、誠におめでとうございます。本日ここに、桜の聖母短期大学において所定の単位を修得され、短期大学士の学位を取得し卒業される皆様に対し、心からの敬意を表するとともに、教職員を代表して心よりお祝い申し上げます。また、これまで卒業生の皆様に温かく見守り、支え、この日を心待ちにしてこられたご家族並びに関係者の皆様のお喜びも、ひとしおのことと拝察いたします。ここに謹んでお祝い申し上げます。さらに、ご来賓の皆様には、ご多用の中ご臨席を賜り、誠にありがとうございます。

本日、桜の聖母短期大学を巣立っていく皆様の姿を前にし、私たち教職員一同は、大きな喜びと誇りを胸にしております。

皆様は本学での学びの中で、幅広い教養とそれぞれの専門分野における知識や技術を身につけるとともに、多くの仲間と出会い、互いに励まし合いながら成長してこられました。学生生活の日々には、喜びや楽しさに満ちた思い出だけではなく、悩みや迷い、不安を抱えながら努力を重ねた時間もあったことでしょう。しかし、その一つひとつの経験こそが、今日ここに立つ皆様の形づくり、人としての厚みを育んできたに違いありません。共に学び、共に歩んだ日々は、これからの人生においてもかけがえのない財産となることでしょう。

皆様の学びを支えてきた大切な柱の一つが、本学の建学の精神であります。桜の聖母短期大学の建学の精神は、「カトリックの精神に根ざした人間観・世界観に基づく知的・倫理的見識を養い、豊かな心と深い教養をもって、愛と奉仕に生きる良き社会人を育成すること」であります。この建学の精神には、一人ひとりのかけがえのない命と人格を尊び、他者への思いやりと奉仕の心をもって社会に貢献する人を育てたいという願いが込められています。皆様はこの学び舎において、専門的な知識や技術のみならず、「愛と奉仕に生きる」という大切な価値観に触れ、それを自らの内に育ててこられました。どうかこの精神を、これからの人生においても大切に胸に刻み続けていただきたいと願っています。

皆様が学生生活を送ったこの福島のは、2011年3月11日に発生した東日本大震災によって、かつて経験したことのない大きな試練に直面しました。地震と津波によって多くの尊い命が失われ、地域社会は甚大な被害を受けました。さらに、東京電力福島第一原子力発電所の事故による原子力災害という未曾有の困難にも向き合うこととなりました。

あの日から15年という歳月が流れました。復興は進み、多くの地域で新たな歩みが始まっています。しかしながら、その歩みはなお道半ばであり、私たちはこれからも未来に向かって歩み続けなければなりません。

震災と原子力災害を経験したこの福島で、人々は互いに支え合い、助け合いながら前に進んできました。その経験を通して、私たちはあらためて、人と人が支え合うことの尊さ、そして一人ひとりの命と尊厳の重みを深く心に刻みました。困難の中にあっても他者を思いやり、共に生きようとする姿こそが、社会を支える力であることを、この福島のは私たちに教えてくれました。

そしてそれはまた、本学の建学の精神が示す人間のあり方でもあります。皆様にはこの学び舎で育んだ「愛と奉仕に生きる」ということをこれからも大切にし、それぞれの歩む道の中で実践していただきたいと思います。一人ひとりの実践が復興を前進させ、そして福島の未来を創る大きな力になるはずです。未来は決して遠いところにあるものではありません。未来とは、まさにこれから皆様が重ねていく一つひとつの歩みの中に形づくられていくものだと考えます。

桜の聖母短期大学での学びは、本日ここで一区切りを迎えます。皆様はこの学び舎を巣立ち、それぞれの新しい道へと歩み始めます。これからの人生には、喜びに満ちた日々もあれば、困難に直面する時もあることでしょう。しかし、本学での学びと経験は、必ずや皆様の歩みを支える確かな礎となることでしょう。どうかどこにいても、どのような道を歩んでも、共に学んだ仲間のこと、この福島の地で学んだことを忘れないでください。そして、それぞれの場所において「愛と奉仕の精神」を大切に、自らが選択した道を自分自身の可能性を信じて歩んでください。

結びに、卒業生の皆様一人ひとりの前途が希望と祝福に満ち、豊かな実りにあふれるものとなることを心より祈念して、式辞といたします。

2026年3月14日  
桜の聖母短期大学  
学長 坂本 真一